

今週の為替相場見通し(2023年4月3日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		130.40 ~ 133.60	132.81	132.00 ~ 135.50
ユーロ	(ドル)		1.0745 ~ 1.0926	1.0842	1.0700 ~ 1.1000
(1ユーロ=)	(円)		140.58 ~ 145.67	144.04	143.00 ~ 147.00
英ポンド	(ドル)		1.2222 ~ 1.2423	1.2328	1.2000 ~ 1.2500
(1英ポンド=)	(円)	*	159.50 ~ 165.47	163.82	160.00 ~ 166.00
豪ドル	(ドル)		0.6634 ~ 0.6737	0.6687	0.6600 ~ 0.6720
(1豪ドル=)	(円)	*	86.68 ~ 89.69	88.77	87.00 ~ 90.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 木村 優太

(1)今週の予想レンジ: 132.00 ~ 135.50 円

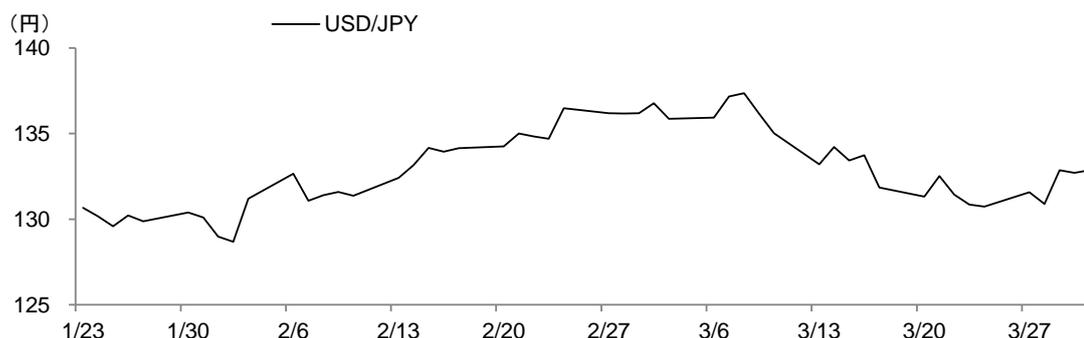
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は堅調に推移。週初27日130.84円でスタートしたドル/円は、破綻した米地銀の買収先が決定との報道を受け金融不安が後退し、米金利の持ち直す動きに131円台後半まで上昇。28日は新規の材料不足の中上値の重い推移となり、期末の実需売りに押されて130円台後半まで下落。海外時間は欧米金利差縮小期待もあってドル売りから週安値付近の130.42円をつける場面があったが、発表された米経済指標が予想を上回り131円台まで反発。ただし米株が軟調に推移する中長続きせず、130円台後半に戻す。29日は金融不安を巡る追加報道がない中、期末の実需買いフローや日経平均株価の大幅高が後押しし、東京時間からドル/円は堅調に推移。海外時間も米株式市場の上昇や、パウエルFRB議長が年内あと1回の追加利上げを想定との発言がドル/円をさらに押し上げ132円台後半まで上昇。30日の東京時間は売り買い交錯するも方向感なく推移。海外時間は米新規失業保険申請数の結果を受け132.96円まで上昇するも、133円台乗せとならず失速し、レンジ内での推移に留まる。31日は仲値にかけて実需買いが進み133円台半ばまで上昇。その後一旦値を戻すも、海外時間入り後にクロス円の買いを背景に週高値の133.60円をつける。その後米経済指標の発表が強弱入り混じる中、米金利の低下に伴い132円台後半での推移となり、132.81円でクローズした。

今週のドル/円相場は高値圏での推移を継続できるかが注目される。3月のFOMCが銀行の信用不安に関する報道が相次ぐ中、市場の不安を煽らないよう注意しながら最低限の利上げのみ実施する形となったが、金融不安問題が一服した状況下今後の金融政策のスタンスに再度注目が集まり、7日(金)に発表される米3月雇用統計を意識した推移が予想される。先週は金融不安を巡る追加のバッドニュースがでてこなかったことで米金利の上昇や株の買戻しから大幅上昇したドル/円だが、それには期末という特殊要因も背景にあったと思われ、今週は先週高値を意識しながら高値更新の後押しとなる材料を探す展開となろう。特に3日(月)発表の米3月ISM製造業景気指数や5日(水)発表の米3月非製造業景気指数は金融不安による他業種のセンチメント冷えこみの影響度を確認するため注目され、予想を上回る結果となると米経済の底堅さが意識されて高値を試す展開も想定される。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/27~3/31)の値動き: 安値 130.40 円 高値 133.60 円 終値 132.81 円



2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.1000 143.00 ~ 147.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、ECB高官による相次ぐタカ派発言やドイツの強いインフレ指標を受け、独金利に追従し上昇した。週初27日、1.0776でオープンしたユーロ/ドルは、米金融機関を巡るリスク心理が改善しドル買い相場となる中、一時週安値となる1.0745に下落も、シュナーベルECB理事やナーゲル・独連銀総裁らのタカ派な発言を背景に独金利上昇とともに1.08ちょうどに反転上昇した。28日、ユーロ/ドルはミュラー・エストニア中銀総裁やレーン・ECB理事らによる追加利上げを支持する発言を受け、独金利上昇とともに1.08台半ばに続伸した。29日、ユーロ/ドルは米金利低下を受け1.08台後半に上値を伸ばすも、リスクオンのドル買いを背景にほぼ往って来いとなった。30日、ユーロ/ドルは独金利低下を背景に1.08台でじり安推移も、独3月消費者物価指数(速報)が市場予想を上回ると、独金利急騰に付随して一時週高値となる1.0926まで上昇した。31日、米金利上昇の流れでユーロ/ドルが軟調に推移する中、ユーロ圏3月消費者物価指数(HICP、速報)が予想を下回ると市場はユーロ売りで反応。その後は米経済指標の結果を受けてドル売り・ユーロ買いとなり1.09付近まで買い戻されるも、一巡後はドル買いに転じ1.08台半ばまで下落した。その後は週末ムードの中じり安で推移し1.0842で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は、先週に引き続き底堅い推移を予想する。欧州大手銀行の買収決定(3月20日)、米地銀の買収先決定(3月27日)を経て、欧米金融不安は一旦落ち着いている。金融政策に目を向けると、ECB当局者は軒並みタカ派姿勢を示すなど利上げ期待が根強い一方、米国では年内利下げ期待も高まっていることから欧米金融政策の方向性の違いが意識されやすく、ドルに対してユーロが買われやすいか。また、先週末のユーロ圏3月HICP(速報)において、エネルギー・食品などを除くコアベースでは+5.7%と前月の+5.6%から加速しており、基調的なインフレの加速が示されている。2月失業率も過去最低水準の6.6%であることなど、足許のユーロ圏の雇用・賃金情勢を踏まえればECBのインフレへの警戒は強まるとみられ、更なるタカ派傾斜も想定しておくべきだろう。今週は3日(月)にユーロ圏3月製造業PMI(確報)、5日(水)にユーロ圏サービス業PMI(確報)の発表が予定されている。月初の米国経済指標にも振られやすいが、週後半にかけてはイースター休暇も控えており、大きな方向感はずらいだらう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/27~3/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.0745 高値 1.0926 終値 1.0842
(対円) 安値 140.58 高値 145.67 終値 144.04



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.2000 ~ 1.2500 160.00 ~ 166.00 円

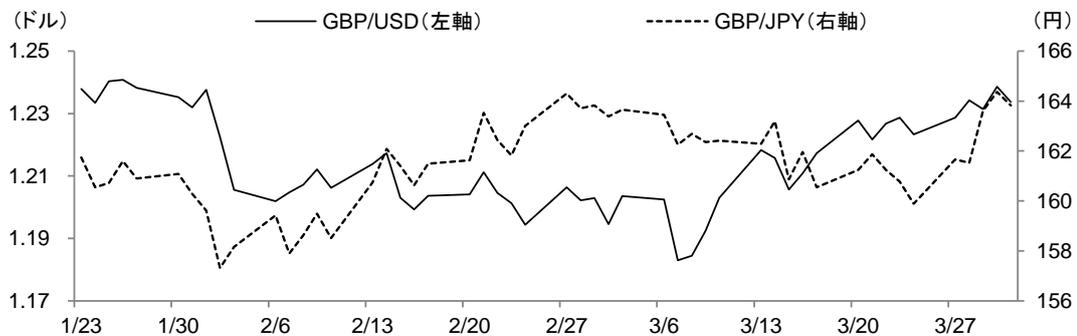
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、金融システム不安が消化されたことによるリーフレアリーで反発し、1.23台半ばで週末に渡った。週初27日は1.22台前半でオープンし、欧州株も全面高となる中、前週末の下落分を取り戻すように底堅く推移した。翌28日は、ベイリー・英中銀総裁が直近の金融不安に関連してハト派と解釈できる発言をしたことで一時下落するも、英金利の底堅い推移を背景に反発し結局1.2341で引けた。29日は新材料に乏しい中、欧州株はリーフレアリー継続となるもポンドはじり安で推移し1.2314で引けた。30日も引き続きリスクオンでポンドは欧州株の全面高を背景に1.23台後半まで上昇。31日は米金利の上昇を背景に一時下落するも、米2月コア個人消費支出(PCE)デフレーターが市場予想を下回り、1.23台半ばで週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は、上値重い中で高値を試しながら経済指標の結果次第で上下する展開を見込む。先週は金融不安が消化されたことからリーフレアリーとなり、リスクオンによる欧州株の上昇を背景にポンドも上昇した。後退していた米利上げも再度織り込まれ、ポンドはテクニカル的にもレンジの高値圏に到達している。昨年12月と今年1月でそれぞれつけた1.24台半ばは抵抗線となっておりそのあたりでもみ合う展開が予想される。経済指標では、とりわけ5日(水)の米3月ISM非製造業景気指数と7日(金)の米3月雇用統計に注目したい。先週の米2月PCEデフレーターでインフレの鈍化を想起させる結果だったが、金融不安が和らいでいる中で利上げを後押しする内容であればポンドにとってはダウンサイドのリスクとなろう。なお欧州各地でイースター休暇があり、英市場も7日は休場となる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/27~3/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.2222 高値 1.2423 終値 1.2328
(対円) 安値 159.50 高値 165.47 終値 163.82



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 0.6600 ~ 0.6720 87.00 ~ 90.50 円

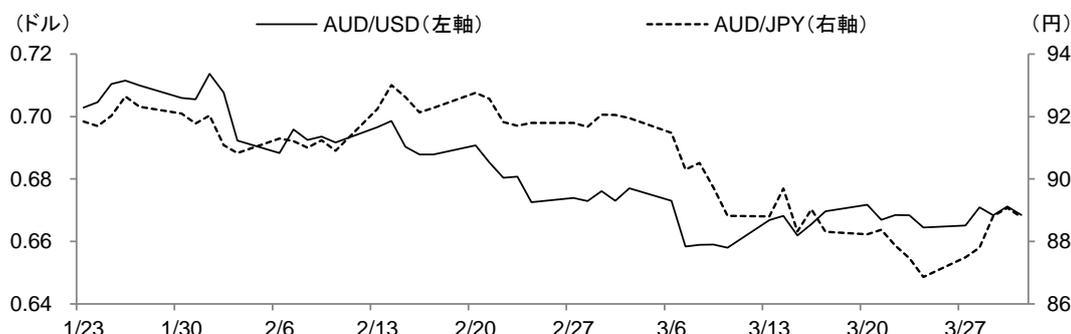
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は小幅上昇。次回RBA会合での利上げ停止観測が強まる中、豪ドルは総じて軟調であったものの、米ドル売り優勢にサポートされた。27日は0.66台半ばにて方向感に欠ける展開。破綻した米地銀の買収合意を受けてリスクオフが後退し金融株中心に回復するも、戻りは鈍く推移。28日は0.66台半ばから0.67台前半まで上昇。豪2月小売売上高は市場予想並み+0.2%の上昇に留まり家計の消費動向の鈍化が示唆されたものの、米ドルの弱含みを背景に小幅上昇となった。29日、0.67台前半から0.66台後半に小幅下落。注目の豪2月消費者物価指数(CPI、前年比)は、+6.8%に鈍化し、市場予想(+7.2%)や前回(+7.4%)を下回る結果となり、2か月連続での鈍化にインフレがピークアウトしたとの見方から次回RBA会合での利上げ見通しが後退。利上げ据え置きかつ年内1回の利下げを織り込む動きに豪ドル売り優勢の展開となった。30日は、0.67を挟んで振幅。月末リバランスによるドル買いに0.6662まで下落する場面があるも、節目の0.6660を前に買い戻され0.67台前半まで反発。米新規失業保険申請件数は小幅上昇するも、FRB高官よりタカ派発言が相次ぐ中でドル反応は限定的となり豪ドルも0.67前半で引けた。31日は、中国3月製造業PMIが51.9と市場予想を上回る結果となった他、非製造業PMIが58.2と2011年5月以来の高水準を記録するなど力強い結果となり、中国株はじめアジア株全般堅調に推移したことで、豪ドルも0.6737まで上昇する場面が見られたが、月末におけるリバランスもありその後は0.66台後半まで下落。米2月コア個人消費支出デフレーターは前月比、前年比ともに市場予想を下回り米金利が低下し米ドル売りの場面があったものの反応は限定的となり0.6687で越週した。

今週の豪ドル相場は上値の重い推移を予想。世界的な金融不安からの金融株を中心とした株式市場の下落も一旦は収束し、先週はリスクオンの買いが優勢となったが、今週は4日のRBAの結果次第では豪ドル売りが再燃する可能性をみておきたい。先週発表された豪2月CPI(前年比)が2か月連続の鈍化となり、小売売上高もごく小幅な伸びに留まったことで今回のRBA会合では利上げの打ち止めかつ年内利下げがメインシナリオとなっており豪ドル上値を抑えよう。但し、同国の雇用指標は依然強い状況が続いており、2月雇用者は+64.5千人と市場予想(+50千人)を上回り、失業率も3.5%と1月の3.7%から改善する結果となっている。また豪当局が30日発表した12~2月期求人数は前期比▲1.5%減の438千人と3四半期連続での減少となるもパンデミック前の2020年2月を大きく上回る状況。また先週発表された中国経済指標の堅調さや需要拡大によるコモディティ価格の上昇等を背景に豪ドル経済展望に明るい兆しが見えていることもあり大幅な値崩れはしばらく中期的なビューは堅調さを維持するものと考え。あくまで目下リスクオフ後退ムードを追い風とした上昇ムードからの短期的な下落を予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/27~3/31)の値動き: (対ドル) 安値 0.6634 高値 0.6737 終値 0.6687
(対円) 安値 86.68 高値 89.69 終値 88.77



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。